

れとなく付るなり、

〔初音草嘶大鑑二〕千早振神の油

貧のぬすみに戀の歌とかや、其躰いやしからぬ浪人、四方髪なるが、紙子に朱鞘の大小をさし、北野の天神の内陣にて、むたいに散錢を取て懐ろへ入る、社僧どもこれは狼藉なりとてとらへければ、いや／＼さわぎたまふな、自分は、去らしほり伽羅之進といふものなりと、なを／＼ねぢこめば、何にもせよ狼藉者なりとひしととらへ、別當へつれゆき、かやう／＼といふ、別當聞いて、其方名は何と云、宿もといづくと詮議しければ、拙子儀は、油の小路邊に罷ある白えほり伽羅之進と申すものなりといふ、其儀ならば苦しうない、許してやれといはる、社僧ども聞て、これは合點參らぬ御下知なり、白綾伽羅之進なれば、盜をしても許し申すべきやといへば、別當いや／＼これはどふでも、かみのあぶらじやといはれた、

香囊

〔倭名類聚抄<sup>十二</sup>香囊<sup>香名</sup>〕唐韻云、幃<sup>許音圍</sup>、又香囊也。

〔雍州府志<sup>十六</sup>土產<sup>香具</sup>略〕中 一種有香囊、或謂句袋、於其方也、有花世界兵部卿等之名、是亦龜末之香

劑、各有輕重多少之差別、各量之而滾合之、其盛絹囊而囊左右著緒繫頂懷、其袋故元稱掛香、今多無其儀、徒納之諸懷、是謂句袋、倭俗句字代香字而用之、

〔嬉遊笑覽<sup>二</sup>服飾<sup>上</sup>〕香囊は丸く銀にて作り、紐を付、鈎<sup>カギ</sup>にてつる物也、<sup>○中</sup>身に香囊を懸ることは、古へ

薰衣香を専ら用ひたれば、かけ香には及ばざるか、後世句ひの玉などいふ物ありてかけ香とす、

〔用拾箱<sup>中</sup>〕誰袖 花袋

誰袖は句ひ袋なり、紐をつけて二、連ね、今袂落しといふ物の如して持し故に、古畫の誰袖に紐のつかざるはなし、是はもと、色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰袖ふれし宿の梅ども、といふ古今集の歌にて名づけしなれば、楊枝さしとなりては名義聞えず、昔はおほく香具賣も持來、見